

「全家族に及ぶ恵の救い」

日本福音キリスト教会連合 静内新生キリスト教会 牧師佐藤信彦

『ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。』（使徒の働き 16：31）主のみ言葉に立ち（聖書信仰）生きる者として、このみ言葉の約束の成就の恵をいただいた。導かれて殉教者のような思いで献身して関西聖書神学校で学んでいたけれども、家族のために愛を持って祈っていない、愛のない者であることを教えられた。み言葉により励まされて家族の救いのため祈り始めた。日々の祈りは当然のことながら休日の月曜日には午前中に祈りの場とされていたから43年を経て父が救われて召され、み言葉の約束が恵の中に成就した。

今思えば献身者でなくても当然のことではあるが、私はできていなかったのである。祈り始めてしばらく経った時、祈りの友で私を教会に導いた直ぐ上の姉が未信者と結婚して教会生活から離れていった。私は姉の未信者との結婚に反対した。すると「人の恋路の邪魔する者は馬に蹴られて死んじまえという諺がある」と姉にいなされてしまった。気がついたら競走馬の産地にある教会の牧師になっていた。主の導きで招聘されたのだが……。因みに馬には横腹を噛まれたことが一度あるが蹴られてはいない。

祈り始めてから一年も経たないうちに母が母教会の在日スウェーデン宣教師団、伊達福音教会（現日本同盟基督教団）にて救いに与り受洗に導かれた。数年後、一番上の姉が出産後の死の床にて、友人のスウェーデン人宣教師インガ・ヨキ師の導きの中に信仰告白し生かされ、同教会にて洗礼を受けた。今も元気に京都信愛教会（日本イエス・キリスト教会団）の交わりの中で信仰生活をおくっている。その後しばらくの時を経て妹が、出産間もない子が形成不全で召されるという悲しみを通して、倶知安福音教会（日本福音キリスト教会連合）の重岡仁志師の導きの中に信仰告白、受洗に導かれた。残された父と信仰生活から離れた姉のために祈り続けた。姉は数回アプローチしたがスルーされていた。しかし、数年前、家庭の事情をきっかけにリバイブして共に家族の救いの集大成である父の救いのために祈れるようになったのである。本当に一言では尽きない喜び、感謝であった。父は相変わらず表立って反対はせず、家の集会にも参加はしていたが、家族で里帰りすると私を尻目に、子供たちを集め「よく考えて後悔しない人生を歩みなさい」と諭しながらカーブを投げってくるのであった。一昨年9月から、高齢のため生活が維持できなくなった90代の両親との同居生活が始まった。リバイブした姉が我が家に来た時、開口一番の「父さんの救いのためにこの時が備えられたのだ、祈っている」との言葉に力づけられた。父の様子がおかしいので受診したら、直腸癌の末期、生存も時間の問題と宣告を受けた。残された時間が少ないと少々焦りを感じながらも、み言葉の約束に希望を与えられて祈る。可能な限り家で生活を維持すると家内と話し確認、姉たちや妹とも集中的に祈り合うことに

し、子ども達にも祈りを依頼した。父の癌は進行し体は蝕まれ共同生活がだんだんと難しくなっていた。父は痛みを耐えながらも入院を拒んでいたが遂に入院となった。死期を悟った父の表情は一見穏やかに見えたが、時折罪のための苦悶が表れるのであった。見舞いの折りに姉たちは主を信じるように優しくアプローチするがスルーされる。私はプロと思うのか取り付く島もない。いよいよ緩和ケアが始まるに至って私は焦り、主の憐みと恵を求めて父の救いを切に祈った。ラストチャンスと姉、妹、甥姪、子どもたちが集まる中に、聖日礼拝を終えてから父を見舞った。先ず、聖書学院で学んでいる娘愛美が「爺ちゃん祈るね」と聖書を読み祈ると父は素直に応じた。リバイブした姉が「父さんイエス様を信じるかい」と確認すると「俺は信じる」と満面の笑みで応じた。私は直ちに父と共に祈り、み言葉により罪の赦しを宣言した。主イエス様の救いは完全であるから全て主に委ねるようにフォローした。罪の苦悶から解放された父は、子ども達孫達に囲まれて笑みをたたえていた。父の突然の変化に主の働きを見せていただき、驚きのなかにも心から主を讃えて感謝した。牧師としての職権乱用にならないように一晩祈りつつ、父に洗礼を受けることにした。本来ならば役員会の諮問、承認を要するところだが、恵の緊急事態として対応することにした。父は翌日、子ども達、孫達に囲まれて受洗、実に嬉しそうであった。その翌々日早朝、父は94年の地上の生涯を終えて主のみ許に召されていった。人生の勝利者としての満面の笑みを私たち兄弟と子ども達と孫達に残して。

43年前に家族の救いのために祈るようにと、上記のみ言葉によってとり扱い導かれた主に深い感謝を覚えている。み言葉（聖書信仰）に立つなら、どんな時も希望を持って行動できることを教えられている。余談になるが親族伝道においても従姉妹が導かれた恵がある。親族伝道をと神学校で無償で配られる伝道文書を親族に送っていたのだが、この従姉妹には「二度と送るな」と断れて中止した。数年後一番上の姉によって導かれ救われた。その後、会う機会があったとき「愚かなことをした」と詫びて、伝道したことを感謝された。彼女も信仰生活をおくっている。他にも信仰生活をおくっている従兄弟やその子どもはとこたちもいる。祈りは「執り成しの祈りのリスト」を超えて答えられている。親族伝道は私たちにとって恵の責任であると教えられる。